

第4回福岡県青少年問題協議会専門委員会議事録要旨

開催日時 平成29年7月26日(水) 14:30～16:30

開催場所 福岡県庁 行政棟10階 特1会議室

出席者 専門委員8名

小泉委員長、大島委員、知名委員、西田委員、橋口委員、花田委員、三宅委員、
吉村委員

1 議題

(1) 次期「福岡県青少年プラン」について(骨子)

① 資料1 次期「福岡県青少年プラン」の基本的事項について

(事務局説明：人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局政策課)

資料に基づき説明

質疑なし

② 資料2 福岡県の青少年の現状と課題

(事務局説明：人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局政策課)

資料に基づき説明

【委員】

感想になるが、前回4ページ、今の資料の6ページで、子どもの生活の中での遊びの大切さと、子どもがどういうふうにごろしているか生活全体が見えるようにしてほしいという意見に対し、対応いただきありがとうございました。前回23年度から5年間の間に、パソコンやゲームなどの利用が増えているとか、外で遊ばない傾向とか見えてくるものがあると思う。

【事務局】

我々が子どものころは、公園でボールを使って、野球やサッカーができていたが、今は危ないということで、だんだん外で遊べなくなっており、それがインターネットの普及と相まって、中に閉じこもってしまう傾向があるようだ。

【委員】

それから、何か社会が、子どもがにぎやかなのを、子どもの声がしていいねではなくて、うるさいと感じるようになり、例えば保育園ができると思ったら、みんなが反対するなどもある。限界集落など、子どもがいなくて将来どうなるのかと言っているところもあれば、一方では、そういうものを迷惑だということもある。日本人の価値観みたいなものも変わってきているのかもしれない。

【委員】

今、公園のいろんな遊具もどんどん外されている。危ないからということで。

【事務局】

全てが危ないということで、さわらないようにさわらないようにしているから、逆に、ここまでしたらけがをするというのが分からなくなっている。我々も過去ブランコから落ちたり、いろいろけがをしたりしていたが、ここまでしたら危ないんだということ、身をもって感じていた。今はそう感じる前に、経験させていない。

【委員】

危機回避能力というか、自分でかわしていく力のようなものは教育の大事な課題だと思っているが、難しいようだ。

【委員】

それと、遊ぶ環境がないというか、狭められているということも関連しているのでは。最近の子どもはインターネットばかりで、外で遊んでいません、のような文は、ちょっと極端過ぎるのではと感じる。遊ぶ環境すら奪われている中で、遊べと言われても困る現状もあるのでは。

【委員】

13ページの地域におけるつながりのところで、前回記載のグラフを変更しているが、前回の資料に載っていた、「悪いことをしたときに近所の人から叱られるか」というグラフも残してよいのでは。

今グラフとして載せている「近所の人に挨拶をするか」と、「(保護者の)近所の人との関わり」は、家庭から地域に対してのアプローチなので、このデータを載せることによって、もう一つ、地域から家庭に対してのアプローチも双方向でしないといけないというのも訴えられると思った。それが後々、地域の方へのメッセージにも最後つながっていればよいと思う。

【委員】

福岡県でずっと取り組んでいるアンビシャス運動では、長い間、子どもの睡眠時間が大変なことになっているということを訴えてきた。日本の子どもの生活リズムが、諸外国に比べても夜型で、朝は学校があつて起きなくちゃいけないから、とても睡眠時間の少ない子どもが育って行って、将来どうなるのか、大きな実験をしているようなものだというDVDも作った。

生活リズムを整えていくには睡眠というものが非常に子どもにとっては大事であるという認識で、そのような取り組みをやってきたのだが、今回の資料で、睡眠に関する記載があまり見当たらない。

睡眠時間がネットの利用により減っているという記載はあるが、大人が遅くまで子どもを連れ回したりして、大人の生活に合わせて子どもも寝るのが遅くなっているとか、睡眠時間が短い、睡眠時間が短いと今度は朝起きるのが遅い、朝起きるのが遅いと朝食をとらない、朝食をとらないと朝の脳の活動に影響があるなどの「負の連鎖」についてアンビシャス運動でずっと訴えてきたこともあり、今回も、睡眠の重要性について記載してほしい。

【委員】

19ページの記載内容について、下線の部分で、中高生も大学生もインターネットの利用が増えている、というところの「インターネットで」の次に、ぜひSNSのことも入れてほしい。「メールの送受信や画像、動画、音楽のダウンロードなどをしています」と書いてあるが、SNSの利用がかなり問題になってきているので、記載を。

【委員】

就労の情報のところの15ページの図、新規学卒者の3年以内の離職率、福岡県の中、高、大学とどれも全国平均よりも高いが、その要因は。

【事務局】

福岡県の特徴としてサービス業が多く、サービス業は不規則な勤務も多いことから、離職率の高さに関係しているのではということ聞いたことがある。

【委員】

15ページの離職率について、これは過去のデータと比較はできるのか。離職率が増えてきているとしたら、それは働く環境が厳しくなっているのか、それとも仕事の現場はそんなに変わらないのに、子どもに何かあって変わってきているのか。それはここでは分析はできないと思うが、離職率の経年変化が分かるようにしてほしい。

【委員】

学生に指導するときに、就職が決まって3年間はしっかり頑張りなさいという話をする。3年間頑張れるとその後も続くと思う。単年度の結果だけのこの図を見ると、今の大学生や卒業生は我慢できないのか、本人に問題があるのかなと見てしまう。

【委員】

昔は石の上にも3年と、3年は頑張りなさいと言ったのに、最近は3カ月と。実はそういう場合がある。

【事務局】

やはり大学の間に自分の好きなこと、やりたいことを見つけた子は、中小であれ大企業であれ、しっかりと行っていると大学の先生が言っておられた。

【委員】

離職については、過労による自殺問題のようなこともあるから、働く環境が苛酷で、一概に我慢が足りないという話でもないかもしれない。

【委員】

最近はほんとうにひどい会社があって、何でまだ勤めていたのか、早くやめればよかったのにというときもある。ひどい労働環境だというのに気づかなくて、無理して続けている。やめたこと自体が一概に悪いかというのとは分からない。

【委員】

17ページ、図31の出会い系サイトとコミュニティサイト。コミュニティサイトの注釈を入れたほうがよいのではないか。

③ 資料3 施策の方向（案）

（事務局説明：人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局政策課）

資料に基づき説明

【委員】

どうしても、学力の向上とか体力の向上だとか、郷土と日本、そして世界を知る力についても、子どもに影響を与えていくとなると、学校が中心的な場にはなってくると思われる。しかし、ドロップアウトした子にも、何らかの形でいろいろな機会を提供してほしい。学力でいうと、中学校までしか行かなかったとか高校を途中でやめた、そういう子がもう一回勉強したいと思ったときに、もう一回勉強をする機会、ルートに対して援助をするなど。

郷土、日本について理解する、世界について理解するというのも、実際は学校へ行っている子だけに重要なことではなくて、やはり働いている子にとっても重要だと感じる。

あと、語学の問題。語学に対して非常に気おくれしているという話も、実際働いている子たちにとっても大事なことであり、実際、福岡にかなり外国人が多くなってきていて、普通に働く上でも語学力が要求されていて、特に中国語、韓国語などが、英語以上に大切な場面も出てくる。例えば、語学を余り負担なく学べる機会を作るとか、学校以外の場面でもという視点も非常に大事だと思う。

【事務局】

委員御意見の、例えば学び直しとか、そういった視点での施策の方向については、今後議論を深めて整理できるものは検討させていただきたい。

【委員】

遊びの体験が子どもにとってとても大事であるということで、現状と課題には、例えば2ページの体力の向上、豊かな心の醸成のところにも遊びについての記載があるが、施策の方向としては、11ページの柱のⅡの社会にはばたく力の育成のところ、初めて、「遊び体験、自発的、能動的な体験活動の充実」として出てくる。

遊びのように、いろんなことにまたがったようなテーマというのは、ここに課題として出ているのに施策にはないと思って見ていくと、別のところで施策として掲げられていたりしている。

【事務局】

施策を進める際に、一つの目的の場合もあるが、それをすることで二つ、三つの課題なり目的が達成されるものもあるため、そういった事業については再掲という形でいろんな施策の方向に入れていきたいと考えている。

【委員】

社会貢献活動とかボランティア活動に関して、この間の意識調査の結果で、何か社会の役に立ちたいという数字が高かったと記憶している。自尊感情が低いとか自信がないとかいう結果がある一方、わりと社会の役には立ちたいという数字があったので、とても安心し、その気持ちをうまくつなげてあげることが大事と感じた。

【委員】

資料13ページで「ボランティア活動を通じて社会の構成員として様々な分野で貢献する青少年の育成」が、基本目標3、キャリア教育の充実の範囲に含まれていて、それでよいのか違和感がある。警察関係などの公的機関での学生ボランティアに、ボランティアをしている理由を尋ねたところ、就職活動に有利だからという発想でやっていたりする。ボランティアとはそういうだけのものではない。ここのキャリア教育の充実というところに

入れ、ここだけに限ってしまうと、ちょっと違うのではという気がする。

【事務局】

キャリア教育については、就職しても早期に退職してしまうことがあることから、その重要性が認識されており、社会の中で自分の力を試していきたいのか、自分の力を使っていきたいのかというようなところを試すキャリア教育が今重要視され、短期間ではなく、長期間のインターンシップなども行われている。一方ボランティア活動の方は、社会の構成員として社会に貢献する、社会参画というところ。

【事務局】

キャリア教育というと、仕事につくためのものというイメージを持たれやすいが、ここで記載しているキャリア教育は、社会をまず知って、それから社会的自立に向けた全てを含む形で、広い意味で使っている。職業に直結するという意味ではなくて、社会にはばたいていく過程を含めてキャリア教育として記載している。

【委員】

あるいは、キャリア教育というとワークキャリアに使われるイメージだが、実際はライフキャリアとは、人生一貫して、それから地域活動や家庭生活を送りながらもどういうふうなキャリアを形成していくか、そういうライフキャリアの視点で見ましようとか言われているような発想でここは書いているのか。だとすると、ちょっとそれが伝わりづらい。文章の最初のほうに社会的に自立していくことができるように書いてはあるが、もう少し何か、幅広い視点でキャリア教育と言っていることが分かるような説明が入れたほうがよい。

【委員】

ボランティアをやることで何らかの能力が向上して、職業に直結しなくともよいというもの、もちろんそうだが、一方で何のためにやるのかという視点で考えると、ボランティアは自分の能力向上のためにはやるものでもないであろうし、一方でボランティアをやることで自分の存在意義を見出したという意味では、豊かな心の醸成にもかかわってくると思うので、どう受け取るかによって、同じ行動、ボランティアをやっている、その行為

の意味づけ、その将来につながる何かは全然変わってくると思うので、いろいろな視点からボランティアというものを捉えてほしい。

【委員】

要所要所で、意味が容易には伝わりにくい言葉、誤解を生んでしまう恐れがある言葉などは、その定義などを書き足したほうがよい。

【委員】

それと、今言われたようにボランティアも、豊かな心の醸成にも関わるし、自分がそうやって地域で何かをやったことで喜ばれて自尊感情がそれによって高まるなど、自尊感情にもつながるので、さっき話に出た遊びと一緒に、色んな施策の方向にまたがっている。それが、見える形にできればよいと思う。

【委員】

5 ページの上の人権のところにある性的指向や性自認、これも説明が必要な言葉と思う。性同一性障害、最近は性自認というふうに呼んだりしているみたいだが、ちょっと一般の方では難しいと思われる。

16 ページあたりの国際的視野を持つ人材とか外国語能力について、データで見ると海外留学とか海外で仕事をするを希望しない理由は語学に自信がないというのは確かに多いが、私が接しているよその国から来ている留学生は、あんまり語学できなくてもどんどん日本に来ている。ほとんど日本語は挨拶もできないで来て、学びながら、学びたての日本語をすぐ使って、「こんにちは、今日はいいお天気ですね」とか挨拶に積極的に来て、「ああ、通じた」とか言って喜んだりしている子が、ぐんぐん上手になっていって、あっという間に使えるようになっていっているのを見ると、語学以外の何か要素というか、たくましさみたいなのをとても感じる。プランに書く、書かないとは別で、ちょっと何か、実態は語学だけのことではおそろくないだろうなと思う。基本的なたくましさみたいな、気持ちからなんだろうが。そういうところを高めていかないと語学だけのことではおそろくないだろうと思う。

【事務局】

海外に留学して帰ってくる子は、もちろん語学力も当然だが、物おじしないというか、大勢の前で発表ができたりする。やっぱり日本人はどうしても人前に出ると、物おじして、ほんとうはわかっているんだけど手も挙げない、そういった子どもが多いと聞いている。

外国に行ったらというけど、やっぱり一番の原因が語学力に自信がないから、海外に行くのに躊躇すると。そこでまず語学力を少し身につけ 海外に行って、ただ海外では語学力だけを身につけるのではなくて、多様性を理解することと、人前で堂々と話できたり、例えば課題解決能力であったり、コミュニケーション能力であったりを身につけて。

我々としては、実際海外で活躍する子どもさんを育てるというよりも、国際的な視野を持って、そしてそれを持った上で地域で活躍していただきたいというのが、実は知事がずっと申している「Think globally, act locally」ということ。

なので、我々も英語だけを身につけるような施策をとるというわけではない。

【委員】

何かこの施策の中に追加できないかと見ていたが、施策としてはこれでいいのではないかと思っている。郷土の魅力を学んで活動していくということで自分の原点をまず知る。語学に自信がないことが留学をためらう理由になっていたが、基本的に自尊心が豊かであれば、外国語ができるとかできないとか、そういうのは全く関係なくなる。だから、教育の根本である自分を愛して他人を愛するということができて、自分に自信がつけば、それが語学にも反映していくものだとは私は思っていて、この施策の中で十分生かせると考えている。

郷土と日本を愛してそういう活動をしていって、多くプレゼンテーションをしていく、そういうふうなものを学んでいって、それでグローバル化に対応した外国語能力の育成という中でも、先生や仲間とどんどん、語学の高さではなくコミュニケーション能力を認めていくことによって、語学に対して自信がないというのは減っていくと私は思っている。なので、施策をどう生かすかという現場の能力にかかっていると思うので、私はこれでうまくいくようになればと思っている。

【委員】

以前、小、中学生を含めた青少年の国際交流に取り組んでいる福岡市のアジア太平洋こ

ども会議の取り組みの紹介があったが、そのような早期の取り組みが大事だと思っている。今、資料にあるのは、高校生が中心のような書きぶりになっている。もっと早期にそういったものの取り組みを始めて耕してやることのほうが大事ではないか。

それから、英語については、例えば小学生からスピーチで、町ぐるみのいろんな取り組みをしていたりとか、あるいはプレゼンテーションみたいなものを支援するなど、どっちみち将来必要になるものを何らか機会をつくれば、ものすごくお金がかかることなく、取り組めるものはあると思う。郷土の魅力を学ぶ活動の推進、今は早いのかもかもしれないが、英語でそれを誰に発信するかという行為でもってできることはあるのでは。

【委員】

子どもからの相談電話対応の活動を通して、感じていることがあり、それは、これらの施策の一番前提にあるものとして、いかに子どもの話が聞かれていないかということ。

コミュニケーションという言葉がたくさん出てきているが、コミュニケーションの始まりは、わからないことを子どもが発信しても、まずは否定しないできちんと聞いてくれるというところからしか始まらない。乳幼児の時期からしっかりと関わってもらって話を聞いてもらえたかという体験がこれにつながっていくと思っているので、子どもが発信しようとしている言葉をきちっと捉えられるよう、大人たちが育っていかないと、子どももいつまでもずっときつい思いをすと思うている。

【委員】

今のお話は、県民の皆さんへのメッセージのところに入ってくると思われる。

【事務局】

家庭で、小さい子どものときに、お母さんも働いて、お父さんも働いて、家に帰って、例えばすぐ食事の支度をするとき、「ねえねえ、お母さん」と子どもが話しかけても「ちょっと待って、今これやってるから」と、なかなか子どもの話をゆっくり聞けなくて、途中まで聞くと「こういうことしたんでしょう？ こうでしょう？」と先回りして親がそういうことを言うことが多いと、以前委員の方からお聞きした。まずは家庭でゆっくり、子どもが何を話したいのか、否定するのではなく、しっかり聞いてあげて、まず会話、コミュニケーションをとろうと。そこが一番大事だと。ですから、保護者の方への

メッセージの中にも、先を急ぐのではなくて、まずはしっかりと子どもと向かい合って、子どもが何を言いたいのかと聞く、それがまた今の小さい子どもがコミュニケーションをどんどん続けていく、そういう話があったため、今の話をしっかりとまたメッセージの中に入れていきたい。

【委員】

忙しいから聞けないときもあるけれど、じゃあ自分は聞けなくても先生がきっちり聞いてくださるとか、社会の中でどこかそういう場所が持てる社会であれば。まずは子どもの話に耳を傾けてみましょうというところが見えてほしいと願っている。

【委員】

プランの管理について。現在のプランには、その実効性を確保するためということで、数値目標が設置してある。その22の指標の進捗状況については、前回の会議で報告があったところだが、今示されている次期青少年プランの案には、最初のところで、「前プランの検証」として指標の大まかな説明と結果について記載されているのみとなっている。

自分としては、この22の指標すべてについて、どのような指標を立て、その結果がどうだったのか、それが分かる資料を次期青少年プランに記載してほしいと考えている。

前回立てた指標が具体的に達成しているのか、していないのかという数値がちゃんと出て、それに基づいて文言が出てきて、これについてはよくできたけど、ここはちょっと課題だとか、そういった整合性が必要じゃないかと考えている。指標は施策が具体化されるところで一番大事なところなので、その意味ではすごく重要だと考えている。

指標については、いわゆる達成したという目標的なものと、そこに行くまでの取り組みの指標と、二つあると思う。例えば、学力を上げますとあって、なかなか上がらないじゃないかというときに、その取り組みの仕方を変えないといけないと思う。

そのあたりの精査も必要だと感じている。

【事務局】

指標について、概略ではなく、すべての指標について達成状況が分かるように次期プランに掲載するという点と、指標に対しての取り組み内容について、精査するという点についてのお話だが、前者については検討したい。

後者については、県の計画としては県政の基本指針となる総合計画がまずあり、その下に青少年関係では、青少年プランがある。学校関係については学校教育の振興計画があり、その中でまた1年ごとの実施計画を教育委員会が作成している。

青少年プランは、具体的な施策の方向を示すという性質のものであり、個々の取り組みについては、教育庁で策定しているような更に細かい計画があり、それを1年ごとにつくり、作業の細部にわたって事業をやっていくところで吸い上げていくという形になっており、青少年プランは計画的の性質として、少し大きなくくりになるため、具体的な分の成果については、もちろん検証はやっていくが、詳しい検証についてはまた一つ具体的な計画でやっているのが現状だと認識している。

(2) その他 県民へのメッセージについて

事務局から説明

質疑なし